

東日本大震災およびそこから復興 に関する倫理レベルからの論点整理： 「平等」について

関口 海良

2011年7月2日

注 意 点

本エッセイの目的はみんなの議論を刺激したり、より明確にしてもらうためのヒントになることです。文章は断定的な表現になっていますが、それだけ確実というわけではありません。また本エッセイの目的は正解を提示することでもありませんし、実験的な議論を含めていますが何か新しいことを言うことでもありません。

本エッセイの「概要」にある文章は、2011年5月7日に筆者のウェブサイトにつづたチャリティーのページ [1] に自分で公開したものです。ただし、誤字・脱字は見つけ次第訂正していつています。本エッセイの内容には、概要を発表した当時に筆者が想定していた議論よりも、さらに進めたものをかなりの程度含めています。

本エッセイは三部作の第二弾です。第一弾では「自由」という視点から論点を整理しています。第三弾では「民主主義」という視点から論点を整理していく予定です。

本エッセイの内容は日本についてのみ当てはまるものとします。なぜなら、国や地域によって自由、平等や、民主主義に関する歴史や受け止め方は異なり、ここで普遍的な議論をすることは困難だと考えたからです。

概要

全ての人間は、異なった才能を持って生まれ、異なった状況の中で生きている。彼や彼女がどのような結果を生み出せるかは、才能と、訓練と、周囲の状況との組み合わせによって決まる。ちなみに、訓練を受け続けられる才能があるかや、良い訓練を受けられる状況にあるかも人それぞれ異なる。ここで言いたいことは、誰かが誰かよりも上とかではなくて、ただみんな違うということである。

差異は放っておいても変化する。自然現象や科学技術のように状況を変える要因があるし、そうでなくても人は変わっていくからである。前者は今回の震災でも見てきた通りである。

社会における平等とは人工的な状態である。今までにも人権というアイデアを考え出し保障してきたように、理不尽な差異は社会の仕組みと人の努力で埋めていかなければならない。基本的には法や教育のシステムで対応していく必要がある。

差異を埋めるのではなく、差異を活かすという視点も重要である。例えば、今回の震災に関してさまざまな支援が行われているが、これはみんな差異を埋めているとも、みんなの差異を活かして活動しているとも理解できる。

ここで扱っているのは社会の中での差異である。一方で、自然の大きな力の前では人間は平等であるとも考えられる。このようなスケールから考えることはとても重要だが、今回は割愛する。

どのような差異を埋めるのか、どのような差異を活かすのか、どうやって実現するのか、それらを設計をしていく必要があるが、意見は分かれるだろう。そこで、意見の対立を処理するのに有効なシステムで、今の日本が持っているものとして、民主主義に注目することができる。

はじめに

本エッセイでは、「平等」とは何かを改めて考えていくことにする。このことは、東日本大震災に関しても、そこからの復興に関しても重要である。なぜなら、平等という考え方を利用することで、困った時に助けが得られるかもしれないからである。重要な点は、このような助けは精神的な面だけでなく、実際的な面についても得られ得ることである。

例えば、仕事がない時に仕事を創ってもらえば助かるし、職を失ってしまった時にお金がもらえれば助かる。平等という考え方を理解することによって、これらのことが本当に起こる可能性があることや、自分も助けを得るためには何を主張したら良いかということがより明確になる。

本エッセイでは、平等の持つ意味について、次の三つのポイントを強調することにする。

- i みんなと違うからといって悩む必要は無いこと
- ii 国から助けてもらえるかもしれないこと
- iii 平等は良く考えて設計する必要があること

以下、ひとつずつ見ていくことにする。

i みんなと違うからといって悩む必要は無いこと

細かく見ていけば人はそれぞれ異なる。大まかに見れば人であるということではみんなが同じに違いない。両方の視点とも大切である。ほどよく生きていくためには上手く使い分けていければ良い。社会においては、人は同じという視点は定着してきているようなので、本エッセイでは人は違うという視点を主に扱うことにする。

実際問題として、みんなは違っていること

人はそれぞれ異なる。これは自然なことである。以下、六つのポイントについて述べる。

ひとつ目として、持って生まれた才能は人により異なる。例えば、復興へ向かうような活動を生まれながらに得意とする人もいれば、元から苦手だと言う人もいるに違いない。

二つ目として、周囲の状況は変化する。例えば、自然現象や科学技術が世界を変えている。今回の震災はまさにそのような状況の変化であった。ちなみに、周囲の状況には他の人の存在も加えることができる。

三つ目として、人の内面は変化する。これは本人にとってもひとつの与えられた状況のように感じられるものである。例えば、今日は体調が良くないと感じられることである。(この点については、5月26日にウェブサイト [1] 上で行った追記にも類似のことを書いておいた。)

四つ目として、周囲の状況の変化が人々の内面の変化を促している。例えば、今回の震災によって考え方が大きく変わったと言えることである。

五つ目として、人は目的に向かって変わっていくことができる。例えば、訓練をしたり経験を積んだりすることによってである。重要な点は、訓練や経験を積みせることで、他の人の性向を方向付けることもできることである。教育とはそのような役割をもつ仕事の典型的なものである。ちなみに、訓練や経験というのでも才能と状況に依存すると言える。

六つ目として、人々を方向付けられるとは言っても、ここまで見てきた全ての要因が完全に一致するというのあり得ないと言える。

要するにまとめると、みんなが違うのが当たり前ということであった。

人であれば同じ法を守る，その条件はみんなが同じ

日本という社会の仕組みは個性を尊重するものとなっている。以下、四つのポイントについて述べる。

ひとつ目として、仮に人々を自然のままに放置しておくと、力の強い人が力の弱い人を支配したり、生まれで人を判断したり、よそ者を排除したりしがちである。なぜなら、世の中にはいろいろな人がいるし、それぞれ事情も異なるからである。そして、弱者は強者ほど権利が認められなくなると言える。重要な点は、このような自然な状態において権利を制限する根拠はしばしば理不尽なものになることである。実際のところ、このような差別的な行動をとってしまうのも仕方がない面もある。なぜなら、人は長い間そうして生きてきたからである。さらに、自分でどんなに良い人であろうとしても、自分の感情や思考さえも完全には制御できないからである。平等の実現とは、そのような行為の中でも理不尽なものを制度や人の努力によって克服していくということである。

二つ目として、その中でも重要なのが人々の条件を平等にしていくことである。特に重要なのが次の二つの意味での平等である。まず、自由を前提として国家を考える際には、全ての個人は自由であるというところから議論を始めることが重要であった。ここに、誰でも人であれば基本的な権利は持てるとするという意味で平等が入っている。次に、そのような個人が集まって法を定めてこれを守っていくとした。ここにも、法という枠組みはひとりひとりとちゃんと向き合ってくれるものとするという意味で平等が入っている。ちなみに、これらを端的に表現しているのが「すべて国民は、法の下に平等...」（日本国憲法 第十四条 第一項）というものだと言える。

三つ目として、自由と平等の関係は複雑である。重要な点は、最初から自由はあったけれど、平等という考え方を確立していくにつれて、自由をより多くの人のものにしていったということである。その最も根幹にある前提条件は、人々がどんなに異なっても全員に存在意味を認めるところから始めることだと言える。このような前提を肯定するひとつの理由としては、いつ誰が理不尽な理由で命を失うか分からないような社会よりは、そこから始めることで得られるより安定した社会を生きた方がそれぞれの個人にとっても良いからというのがあると言える。それから、存在意味については死刑制度などの難しい問題もあると言える。

四つ目として、より具体的に平等とはどのような意味を持つかは、法の定めた内容に基づくことになる。世の中には、大まかに言えば、条件の平等あるいは機会の平等を目指す立場と、結果の平等を目指す立場の二つがある。重要な点は、法の内容次第ではいずれの平等も、より詳細な平等も実現できることである。次章では、このような個別的な意味での平等についてより詳しく述べることにする。

要するにまとめると、日本における平等のもっとも基本的な意味は法の下での平等で、これは個人の自由とつながっているということであった。

注意点

注意点として、ここでは国際的な問題について触れておく。以下、三つのポイントについて述べる。

ひとつ目として、国際的な方向性も個性を否定するものではないと言える。例えば、国際人権規約においても個人の自由を守るように定められていることがこれを示している。ちなみに、日本にとっても国際的な方向性を考慮しておくことはとても重要である。

二つ目として、日本人であっても外国の法を守らなければならない場合もある。例えば、海外旅行の際に現地の法に従うといったことである。

三つ目として、国際法についても関係するものは個人としてもこれを守る必要がある。なぜなら、これは国際社会における法であると言えるし、個人に適用されるものもあるからである。例えば、個人が条約に従わなかったことで起訴されることもある。

これらの点については、前回のエッセイ [2] では明示していなかったもので、各自でも調べるなどして注意していただきたい。

以上のように本章では、みんなが異なっても良いことについて述べた。

ii 国から助けてもらえるかもしれないこと

日本で誰かの助けが必要な場合は、自分でそれを依頼し獲得していく必要がある。なぜなら、この社会は個人の自由を前提としているからである。ただし、場合によっては国から支援をしてもらえることもある。

法の定めによって決まる個別的な意味での平等

実際問題として、個人だけでなく国全体として取り組んでいった方がよい課題もある。平等化とはそのような取り組みの典型的なものだと言える。以下、五つのポイントについて述べる。

ひとつ目として、国全体として個別的な意味での平等化をすることはまさに国家の存在理由と言える。なぜなら、これによってより安定した社会を実現できると考えられるからである。そしてそれゆえ、個人にもより良い生活を提供できると考えられるからである。例えば、基本的人権を保障することである。また、今回の震災のような個人では対処することが困難な事態において被災者を救済することである。例えば、復興基本法を定めて国として取り組めるようにしたというのがまさにこれである。他にも、今回の震災でも見られた警察、消防や、自衛隊などによる大きな支援はこれである。重要な点は、以上のような助け合いは人々が完全に自由に生きていたのでは実現が難しかったと考えられることである。そして、誰でも平等に受けられることである。

二つ目として、何をもって平等としていくかは個別に考えていく必要がある。なぜなら、それぞれ事情は異なるし、全てを平等化すると個人の自由が無くなるし、国家に必要以上に大きな力を持たせることにもリスクがあるからであった。ちなみに、国としてこのような個別的な意味での平等を実現していくためには、そのように法を整備すれば良いということになる。

三つ目として、平等について法で定めることは、現実世界と想定している世界との間にある誤差の影響を修正する役割もあると言える。言い換えれば、個人は自由であるとしたことや、そこから「法の下での平等」を導き出したことによる誤差である。これらの想定だけでは、生まれ持った才能や置かれた状況が異なることによる理不尽さを見過ごしてしまいがちになってしまう。国家としても、このような理不尽さに対応していく必要があると言える。例えば、社会的弱者の存在を認めて救っていくというのがこのような補完の例にあたる。

四つ目として、法はそれ自体に、法の下での平等を考える際に必要だった想定を改めて正当化する役割もあると言える。例えば、基本的人権は法の下での平等を考える上での前提条件だったけれど、これを保障するように改めて定めているということである。

五つ目として、平等に関する問題の他にも、自由を前提とした国家という仕組みでは見過ごしがちな問題があるので注意が必要である。例え

ば、地球規模の問題、家族の問題、世代間の問題などである。もつとも、法を整備すればこれらの問題を重視するように方向付けができると言える。例えば、復興構想会議の提言の中で世代間の問題に触れているのも、このような方向付けを目指した例だと言える。

要するにまとめると、国が助けてくれる場合もあるということであった。

論理的な平等

ここまでの議論で重要なことは、平等化の有効性は論理的にも確認できたことである。以下、三つのポイントについて述べる。

ひとつ目として、歴史的に見れば、平等という考え方は宗教的な背景を持っていると言える。代表的なものがキリスト教の影響である。例えば、神様の前では全ての人は平等であるといったものである。

二つ目として、今回は平等という考え方に関する論理と信仰とを意図的に分けている。そのねらいは、論理的な面からだけでも平等という考え方が有効なことを確認することである。なぜなら、論理というのが最も中立的な視点だと考えられるからである。そしてそれゆえ、日本といういろいろな宗教や考え方がある国にとってはより馴染み易いもののできると考えるからである。もちろん、宗教的な面はそれ自体でとても重要な意味を持っていることは間違いない。

三つ目として、宗教に限らず、さまざまな文化の良いところを取り入れていくというのは日本文化の良いところだと言える。平等についても、論理的にも有効性が確認できたのだから、引き続き取り入れていけば良いと言える。

要するにまとめると、平等という考え方を論理的な考察によって採用していくことには意味があるということであった。

注意点

個別的な意味での平等とは、個人が主張して勝ち取っていかなければいけないものである。以下、三つのポイントについて述べる。

ひとつ目として、平等化を求める主張の内容が正当であっても、その要求が通らない場合がある。なぜなら、日本あるいは世界全体にある資源は限られているからである。そしてそれゆえ、全員の主張を受け入れる余裕は無いからである。さらに加えて、利害が対立したり、相手から誤解をされたり、理不尽な扱いを受けることもあるからである。なぜなら、

人も事情もそれぞれだからである。ちなみに、このような意見の対立をそれなりに処理するための方法も見いだされてきている。次回のエッセイでは、これらの方法について民主主義という視点から述べていく予定である。

二つ目として、国に平等化を求める際には、その平等化の結果として国民全体にとっても良いことがあるという論理まで説明できると良い。なぜなら、この社会は個人の自由を前提としているからである。そしてさらに、国家としては国民の代表として判断しなければならないという事情があるからである。そしてそれゆえ、他の人の自由を制限するだけとみなされるような平等化は難しいと言えるからである。

三つ目として、損失の原因がいかに個人ではどうしようもないものであったかを説明できると良い。なぜなら、その原因の中に社会の仕組みの不完全さによるものが見つかれば、その分までを個人の責任とするかどうかは議論の余地があるからである。ただし、これらの議論が怠慢や責任転嫁によるものとみなされると逆効果になり得ることには注意が必要である。

要するにまとめると、国からの助けは完全ではなく、これを得るためには努力も必要ということであった。

以上のように本章では、場合によっては国から助けてもらえるかもしれないことについて述べた。

iii 平等は良く考えて設計する必要があること

復興における平等化に関して重要なことは、差異に注目すること、震災で受けたエネルギーをプラスの仕事に変えていくことと、想定している境界線の外側の世界も尊重することである。

「差異」という視点

個別的な意味での平等を設計する際には、どのような差異を埋めるのか、どのような差異を活かすのかや、それらをどのように実現するのかといった視点が重要である。以下、三つのポイントについて述べる。

ひとつ目として、差異という視点が有効なのは、ひとつの理解として平等というのが理不尽な差異を埋めることに他ならないと言えるからである。そしてそれゆえ、この視点まで遡って考えることで、よりありのままに問題を理解できるからである。例えば、機会の平等と結果の平等

を対立させない視点を提供できる。なぜなら、どちらも何らかの差異を埋めているという点では共通しているからである。例えば、今回の震災からの復興に関しても、老若男女の全てに雇用の機会を提供していくことも、支援金によって最低限の生活の安定を図ることも共に重要である。ここでは、いずれのケースについても、被災していない人に比べて被災した人の生活がどれだけ苦しくなってしまったかという意味での差異を扱っていることは共通していると言える。さらに言えば、この差異をより細かく見ていくことによって平等化の際の重み付けが可能となると言える。例えば、被害程度や再建方法に応じて支援金の支給額を決めていくというのはまさにこれである。

二つ目として、差異を活かすという視点が重要である。例えば、今回行われている支援活動においても人々の多様性が活かされていると言える。なぜなら、これによってひとりでは思い付かなかったような支援が生まれていると言えるからである。そしてそれゆえ、より多様なニーズに応えられていると言えるからである。さらに言えば、そもそも被災していない人が大勢いなかったら、これほど豊かな支援はできなかったと言える。他にも、失敗に対してより強くなっていると言える。例えば、仮にその多様な支援の半分が失敗してしまったとしても、ひとつの方法に従ってそれが失敗してしまうよりは良かったと言える。ちなみに、ここでは確率論的に有効性が確認できることに加え、支援の多様性が人々の判断の結果として生じたことも重要である。なぜなら、人は数字としてだけではなく、個性を持った存在としても扱われるべきだからである。要するに、人々が全て同じというのは良くないということであった。

三つ目として、個別的な意味での平等の設計においても、基本的には何らかの方向性はあった方が良い。なぜなら、これによってより体系的に差異についての判断ができるようになるからである。例えば、これからのライフスタイルを描いていくということである。さらに言えば、自由や平等、持続可能性や、文化多様性といった議論もこれにあたる。ただし、中途半端な方向性に絞ることが逆に良くないことは、多様性が無くなるリスクを考えれば明らかである。

要するにまとめると、差異という視点が有効ということであった。

「エネルギー保存」という視点

個別的な意味での平等を設計する際には、エネルギー保存という視点を利用することも有効である。なぜなら、これによって平等化のために必

要な資源をどこから持ってきたら良いかや、その際どこに注意をしたら良いかがより明確になるからである。ここでエネルギー保存とは、エネルギーの全体の量は変わらないということである。ここでエネルギーとしては、物理的なものだけではなく社会的なものも含めることにしている。例えば、経済的なエネルギーや人の気持ちのエネルギーといったものも含めることにしている。以下、三つのポイントについて述べる。

ひとつ目として、地震や津波で受けた影響をプラスの仕事に変えていくことが有効である。なぜなら、復興において必要な仕事の内のいくらかを自然が負担したことのできるからである。そしてその分だけ、人々の側でする仕事の量が少なくて済むと考えられるからである。言い換えれば、自然も平等化に参加させることができたと言えるからである。例えば、今回の震災によって人々の考え方も街の姿も大きく変わったと言える。これらの変化を前向きな意味のあるものへ変換していくということである。例えば、震災によって得た知見に基づいて著作を発表したり、スポーツでチャリティーの試合をしたり、追悼施設を作るということである。

二つ目として、そのような活動におけるコンテンツ的な仕事の役割は重要である。なぜなら、今回の震災では多くの物質的な資源を失ったと考えられるからである。そして、コンテンツ的な仕事は物質的な資源がなくても成果を出せるからである。

三つ目として、想定している境界線の外側を、言い換えれば想定している系の外側を、十分に尊重しなければならない。例えば、日本について考える際は海外のことを尊重しなければならない。なぜなら、エネルギー保存という考え方をを用いると、境界線の外側にエネルギーを求めた方が楽だという結論を導くことができるからである。言い換えれば、より広い領域を想定して平等化を目指した方が、ひとりあたりの負担が少なくて済むと考えられるからである。そしてそれゆえ、この論理が侵略行為を正当化することに容易に結びつくからである。これは帝国主義に他ならない。重要な点は、帝国主義には正当性がないことである。そして、これがかえって高く付くこともすでに確認されていることである。

例えば、これを防ぐためには、相手にとっても価値のあるサービスを提供していくことが重要である。その例としては、今回の震災の記憶を人類全体で共有できるようにするというのは良いアイデアである。

要するにまとめると、エネルギー保存という考え方が有効ということであった。

注意点

個別的な意味での平等について、これを良く考えて設計していく際にも注意が必要である。以下、三つのポイントについて述べる。

ひとつ目として、ひとつの考え方に執着しないようにする必要がある。なぜなら、現実世界はもっと複雑だからである。例えば、エネルギー保存という視点は有効だけれど、これによる結論が全て正しいと考えるのは良くない。想定に限界があることは今回の震災からの教訓でもあった。

二つ目として、設計を詳細に考えようとするあまり、そもそもの目的を忘れてしまうことがある。例えば、平等化をしていくことがそもそも本当に被災者や社会のためになるかということをおぼろげに忘れることがある。このことは問い続けていく必要がある。

三つ目として、設計の難易度を上げることが必ずしも良い結果を生むとは限らない。設計に関しては、同じような結果を得られるのであれば、一番簡単に実現できる手段を選択するという事は良くあることである。オプション的な手段を取り入れる際には、それが確かにより良い結果につながることを確認しながら行っていくことが有効である。

要するにまとめると、良く考える際にも注意が必要ということであった。

以上のように本章では、平等は良く考えて設計していく必要があることについて述べた。

おわりに

本エッセイでは、日本における平等は二段構えであることについて述べた。ひとつ目は基盤としての法の下での平等であり、もうひとつはより個別的な意味での平等ということであった。以下、本エッセイで見えてきた三つのポイントのまとめである。

ひとつ目として、平等といっても個性を尊重することと矛盾しなかった。なぜなら、基本的な意味での平等とは法の下での平等であり、それは条件についての平等だからであった。

二つ目として、国として平等化を進めていくことが重要な場合もあった。そしてこれを実現するためには、法を整備するのがひとつの手段であった。ただし、これらの健全性や不完全性には注意が必要であった。

三つ目として、何をもちいて平等とするかは慎重に設計する必要がある。そしてそのためには、差異やエネルギー保存といった視点を利用することが有効であった。

要するにまとめると、これからも平等という視点から社会について考えていくことは有効ということであった。

cf. Abstracts in English (「概要」の英語版)

Everyone was born with different talents and exists in different situations. All the results people produce are influenced by their talents, training and their situations; the training is also depended on their talents and their situations. We are neither superior nor inferior to the others: just different.

The differences change in terms of natural phenomena, sciences and technologies, and human actions. Some of the changes were confirmed in this disaster too. To seek and realize equality in a society is an artificial condition. But every society and everyone in Japan should keep compensating unfair differences as people have worked out and secured the human rights. Basically speaking, people can utilize systems of the law and the education to perform it.

It is also important to make use of some kinds of differences to establish complementarity. For example, various supports people are offering for victims can be understood not only as a result of compensation but also as that of complementation.

The differences mentioned here is social ones and people are supposed to be just equal in front of the great power of the nature. To discuss such equality is not a main topics of this essay, though such consideration is very important.

People are supposed to have different positions to design the compensation and the complementation. And democracy is a system Japan now have to manage such arguments.

参考資料

- [1] 筆者のウェブサイトについたチャリティーのページ (日本語) : <http://www.ethics-level.com/charity-jp.html>
- [2] 関口海良, 東日本大震災およびそこからの復興に関する倫理レベルからの論点整理:「自由」について, 2011.